

## その人らしく、輝ける瞬間に立ち会って

医療法人カーサミア やまおか在宅クリニック院長 山岡 憲夫

### 呼吸器外科医として キャリアをスタート

出身地である大分県大分市のこの地で2009年に開業し、早いもので10年目を迎えました。患者さんとそのご家族に寄り添いたい——。その一心で在宅緩和ケアに取り組んできましたが、これまでに経験した多くの出会いが今の私を導いてくれたと感じています。

エンジニアに憧れて、理工学部を目指しながら広島の子供病院に通っていた時に、一緒に大分から来た友人が無医村の出身だったのです。医師が地元で居ない環境がいかにも不安であったか、という話を彼から聞くうちに、医学部へと希望学部を変更し、医師を目指すことを決意したのです。周りには医療関係者が居ない環境のなかで育ったので、医師というものに対して具体的なイメージが湧かない状態だったのですが、純粋に「人助けがしたい」という気持ちが私の中に芽生えました。長崎大学医学部へと進み、卒業後、第一外科に入局。当時は、外科が花道の時代で、実際に外科医を志望する人が周りにも多かったですね。患者さんの命に直結で携わる外科医になりたいと考え、肺癌が増加しつつあったという背景もありましたが、外科のなかでもより高度な技術を要する呼吸器外科を選択しました。その後、佐賀県の国立嬉野病院(現 国立病院機構嬉野医療センター)、大分県立病院で研鑽を積み、1,000例以上の肺癌手術に執刀し、患者さんの命を救っているという手応え

を感じていました。

### 緩和ケア医としての 転身を決意

副部長として招かれた大分県立病院では、1994年に41歳の時に胸部外科部長に就任し、外科医としてのキャリアを着実に積んでいるように周囲の人たちの眼には映っていたと思います。ですが、肺癌の患者さんの命を救う手術で、半数の方は完治するのですが、残念ながら残りの半数の患者さんは再発して県立病院に戻ってくる現実と直面しました。「果たして、本当に患者さんを救えているのか？」というジレンマを抱えていました。

そのような葛藤の日々を過ごすなか、ある日、16歳の女の子がお母さんに付き添われて県立病院を訪れてきました。高校に入学したばかりでセーラー服に身を包んだ初々しい雰囲気の花嫁さんが、当の患者さんだとは思ってもよかったです。学校の健康診断で右肺に大きな影があり、肺癌がみつかりました。手術によって右肺の約40%を切除し、その後は高校～大学まで再発なく過ごしていたものの、23歳でがんが再発し、県立病院に戻ってきました。抗がん剤と放射線治療を行うも、やがてがんは全身へと転移し、約3年後、26歳のときにはもはや手の施しようがない状態になりました。つらい治療に耐えながらも、「山岡先生、頑張るからね」という彼女の姿をみているうちに、「手術で治療ができなくなった患者さんにどう向き合えばいいのだろうか」という思いが強くなっていっ